

## 分科会の名称

# 5 里山と竹

## 委員名と役割分担

分科会代表：田代 武男

委員：林 正治

## タイムテーブル

第一部 10:00～10:30 「竹や笹について困りごと相談」の実施（代表：田代 武男）

第二部 10:30～11:30 講演会「竹が暴れている」（竹文化振興会県支部長：君塚善利）

第三部 11:30～12:00 竹害についての討論会"

## 出席者数

22名

## 基調講演等の内容

- 1 最近、里山の植生を壊す「竹害」が各地で問題化している。里山を竹害から守るためにはどうしても竹についての基礎的な知識の普及が必要で
- 2 里山の竹害は深刻である。寄せられた相談に対しては具体的な対策を示して指導。出席者には、竹枯殺に役立つと思われる参考資料を配布。
- 3 講演会（君塚善利）で、大多喜町古墳は竹に覆われ、山が古墳かわからない状態になっている。竹が暴れ放題に暴れていると報告。
- 4 竹害についての討論会では、放置され、枯れた竹が多い竹林は大雨で表土が流れやすく防災上も問題が多いとの指摘があった。"

## 分科会の結論

竹は優れた特性から有効利用されている反面、繁殖力がすさまじく竹害が多く発生している。竹の有効面が強調されるあまり、竹害に本当に困っている人の声は無視されてきたのが現状である。今や、里山の竹害は危機的な状況にあり、その対策が急務である。

## 分科会の課題

## 分科会の提言

## その他特筆すべき内容

## 反省等

## その他

## 目的

報告書掲載予定写真・カット・図版等

## 分科会の名称 **6 里山と食**

### タイムテーブル

10:30 受付 10:50 オリエンテーション 11:000~12:00 太巻き寿司体験指導千葉県伝統郷土料理研究会 龍崎英子、峯岸喜子、杉崎幸子、伊藤芙美子、山形礼子 12:20~13:20 昼食・交流 13:30~15:30 車座食談義「みんなで語ろう！千葉の食」 パネラー 石田三示（大山千枚田保存会理事長） 池田恵美子（南総ふるさと発見伝まほろば編集長） 菅沼弘夫（子どもに学ぶ会代表） 平本紀久雄（千葉の海と漁業を考える会代表） 美濃輪やよい（元千葉県農林部生活改良普及員） 山口孝（地方公務員） 龍崎英子（千葉県伝統郷土料理研究会会長） コーディネーター 遠藤陽子（千葉自然学校事務局長） 3歳で参加の彩花ちゃんは、自然体験指導員と里山観察と草もちづくり 15:30~15:50 まとめと草もちでおやつ 16:00 解散

### 出席者数

36名

### 基調講演等の内容

#### 太巻き寿司体験

太巻き寿司が、千葉県の代表的な郷土料理として取り上げられるようになった経緯を龍崎英子さんから、またその発端となった農村の女性たちの活動を元千葉県農林部の生活改良普及員的美濃輪弥生さんから聞き、参加者全員が6班に分かれて「揚げは蝶」の模様の寿司を巻きました。

#### 車座食談義「みんなで語ろう！千葉の食」

パネラーから、郷土料理や食の現状について、現在のような一律栄養重視の食では子どもの味覚が育たない、週1回学校に弁当を持って行くなどして味覚を多様に変えて行く必要があること、自分たちが普段食べている何気ないものにもっと自信を持ち、周りの人に伝えて行きたい、漁師が普段食べているものをもっと見直し活かして行きたいなど話し合われ、山武郡内の農家のお母さんたちが、太巻き寿司研究会を立ち上げて活動してきて、現在は、この技術を活かして太巻き寿司を販売して収入を得までになっていることが紹介された。

また、先人の知恵を伝承したいと子どもたちを対象に食文化啓蒙事業に取り組んだり、食文化フォーラムを立ち上げ活動していることなど話し合われた。

討論会等の内容 今後は、「おかき」の上手なおばあちゃん、 どんの「ラッキョウ漬け」など名人の掘り起こしや生活改良普及員が収集しているものなどを記録に残す努力が必要ととも、他県では新聞社などが中心となって郷土の伝統料理を掲載したり本しているが、県内でももっとこのような取り組みが活発になって欲しい、昔は集まりに「下げ重」を持って行く習慣があったが、これを復元するなどして宮城県宮崎町で結城登美雄さんがやられているような食の文化祭がやれるといいなど提案された。また、地域のおいしいものを集めて「南総里見八犬伝弁当」を売り出していること、これを更に広がりのある取り組みとするため「弁当コンテスト」などしてコミュニティビジネスとして根付かせたいとか食文化フォーラムの活動をとおして、一律の料理で知恵がない観光業者の意識の変革をしたいなど話し合われた。 それには、地産地消のくらしが大切で、子どもたちに身体を動かして腹が減る体験をさせ、「うまい！」・感動を味あわせたい、このなかで子どもたちの人間性が育つ。保育園・小学校に食育指導に出かけている。給食で地元のもの食べられるようにJ Aや直売場が生産体制に取り組んでいることも紹介された。

フロアから、平成19年春に企画されているデエステイネーションキャンペーンで是非千葉の食を大きくアピールしたいとの提案もされ、今後が期待される話し合いの場となった。

### 分科会の結論

食は、一人ひとりの健康を維持するだけでなく、そのあり方は農林漁業を変え、環境にも大きな影響を及ぼします。先人が里山・海とかかわりながらその暮らしのなかで育んできた食の知恵や技術を次代に伝えることは、農林漁業を守り、環境を保全することにも繋がることを意識して活動の輪を広げて行きたい。

### 分科会の課題

### 分科会の提言

### その他特筆すべき内容

千葉県には、里山や海で育まれた郷土料理がたくさんあります。しかし、ライフスタイル等の変化により、これらの伝統

食が失われつつあります。食が失われるだけでなく、食の変化に伴う健康問題、農林漁業や環境問題も起こっています。

里山や海とかかわる暮らしの中で生まれ、伝え続けてきた郷土料理について語り、これを次代に伝えて行くために、今、何が必要かについて語り合います。

## 反省等

車座食談義みんなで語ろう！千葉の食

## その他

## 目的

報告書掲載予定写真・カット・図版等

分科会の名称

## 7 里山と芸術

### 委員名と役割分担

代表：宮村 賢治

副代表：山下 樹里

記録：長澤 瑠里

委員：栗原 祐治・高山 斎一郎・川本 幸立・小林 正幸"

### タイムテーブル

### 出席者数

### 基調講演等の内容

### 討論会等の内容

### 分科会の結論

### 分科会の課題

### 分科会の提言

### その他特筆すべき内容

### 反省等

### その他

### 目的

報告書掲載予定写真・カット・図版等

### 分科会の名称

8 里山と医療・福祉

### テーマ

谷津田における福祉の有り方と新たな相互理解や交流の試み

### 趣旨

"

「森林療法」が注目されています。人は自然に接することにより確かに癒されます。特に長期にわたって人間が関わってきた美しい里山の自然には、人の心を解放し、「人と人」「人と自然」「人と生き物」を結びつける大きな力があります。「人と人」との相互理解を超え、開放された心の中で「人と自然」「人と生き物」との相互理解までも可能にします。そうしたやわらかい関係の中で人は癒されるのだと思います。専門書を読むよりも、実際に里山に行き、感覚を研ぎ澄まして感じる必要があります。きっと心地よい何かを発見できるはずで、今回の企画では、大藪池谷津田（千葉市緑区）でのワークショップをとおして参加者が時間と空間を共有するなかで、いろいろなものに触発されて身体を動かし、語り合い、「子供」「高齢者」「障害者」「健常者」の枠を取り払い、人や自然との相互理解と交流につながることを期待しています。

"

### 委員名と役割分担

分科会代表：横田耕明

分科会副代表：林みね子

実行委員：里山の仲間たち、栗原祐治、Wi-CAN（学生）、小林正幸、細川隆、福田洋、高山斉一郎、プロジェクトとけメンバー、石井良澄、大枝昇、友田聡子

### タイムテーブル

9：50～開会式 10：00～11：30 竹のドーム作り・杉の間伐材を使ったテーブル、椅子作り 11：30～12：50 谷津田を散策して、野草のてんぷら＋昼食 12：50～15：00 竹の楽器作り・演奏 15：00～閉会式

### 出席者数

約100人

### 基調講演等の内容

### 討論会等の内容

こどもと何らかの障害のある方々を中心に工作作業を行った。参加者が個々の特徴を認め合い、助け合いながら、楽しく活動することにより、地域福祉のあり方を模索した。現地里山の整備を兼ね、メダケを刈り取り、竹のドームを作ったり、杉の間伐材を使って長さ4mのテーブルセット（テーブル1、長いす2）を作った。谷津田を散策し野草を取り、てんぷらにして食べた。味覚で初夏の自然の恵みを感じる。メダケ、マダケを使った楽器作りをし、それを使った演奏に挑戦した。

### 分科会の結論

里山は、地域の子どもたち、高齢者、何らかの障害のある人々、全ての人々を包み込み、身心を癒してくれる大きな力を持っていることを実感しました。今回の里山での＜協働作業＞は、そのことを我々に教えてくれました。里山と医療・福祉は密接につながっているのです。だからこそ、我々は、この残された里山をみんなで守り、育てて行かなければなりません。残土・産廃の投棄場にはいけません。次世代にこのすばらしい財産を引き継いでいくために。

### 分科会の課題

里山は、地域の子どもたち、高齢者、何らかの障害のある人々、全ての人々を包み込み、身心を癒してくれる大きな力を持っていることを実感しました。今回の里山での＜協働作業＞は、そのことを我々に教えてくれました。里山と医療・福祉は密接につながっているのです。だからこそ、我々は、この残された里山をみんなで守り、育てて行かなければなりません。残土・産廃の投棄場にはいけません。次世代にこのすばらしい財産を引き継いでいくために。

## 分科会の提言

里山は、地域子どもたち、高齢者、何らかの障害のある人々、全ての人々を包み込み、身心を癒してくれる大きな力を持っていることを実感しました。今回の里山での〈協働作業〉は、そのことを我々に教えてくれました。里山と医療・福祉は密接につながっているのです。だからこそ、我々は、この残された里山をみんなで守り、育てて行かなければなりません。残土・産廃の投棄場にはいけません。次世代にこのすばらしい財産を引き継いでいくために。

その他特筆すべき内容

今回の〈協働作業〉は、里山を整備しながら、里山を遊ぶというワークショップを行いました。最初は12センチを越える釘を打つことに戸惑っていた人も、みんながあきらめず最後までやり遂げました。1本の釘打ちに30分以上がんばり続けた女の子もいました。みんなが見守りながら、困ったときだけ手をさしのべるといふ雰囲気が自然に出来上がりました。我々は普段の生活の中で、何かの成長をじっと待つことができなくなっているのではないかと心配していましたが、里山での協働作業は全てを包み込んで、みんなの心を豊かにしてくれたような気がします。里山と医療・福祉というテーマを考えると、まず同じステージに立つことの大切さを実感しました。里山にあるもので何ができるかな？、どんな遊びが考えられる？みんなで楽しむためにはどんなこと工夫し、解決したらいい？みんなで考えましょう。みんなで体を動かしましょう。そこにヒントがあるような気がします。みなさんに、ご紹介したい詩があります。「いのち」 花です虫ですから だす 鳥です草です ころです それらはみんないのちです いのちはどれも一つです いのちのふるさと地球も一つ 風が吹き雲の流れる地球の上に 要らないものなどありません 互いに支えているんです 見えない手を出し声を出し 互いに支えているんです どれも一つどれにも一つ 全部が大事ないのちです

## 反省等

今回はスケジュール上、近隣への案内が遅くなったので、次回は早めに活動紹介し参加者を増やしたい。

## その他

## 目的

報告書掲載予定写真・カット・図版等

## 9 里山と政策

### 委員名と役割分担

分科会代表：小西由希子

副代表・記録：内山真義

委員：伊原加奈子、金親博榮、瓜生達哉、長正子、小西朝希子、田中正彦

### タイムテーブル

10:00～10:05 あいさつ、趣旨説明

10:05～10:25 事例紹介 里山保育園（社会福祉法人わこう村和光保育園園長兼大工鈴木眞廣氏）

10:25～10:50 事例紹介 子どもたちの森（千葉市役所公園緑地部鈴木康博氏）

10:50～11:15 事例紹介 四街道プレーパーク「どんぐりの森」（四街道プレーパークどんぐりの森代表古川美之氏）

11:15～12:10 質疑応答

12:10～12:15 まとめ

### 出席者数

18名

### 基調講演等の内容

" 鈴木眞廣さん

鈴木さんの美しい歌声「だってここは、雨もり保育園」で始まり、保育園での子どもたちの生活の様子が映像で紹介された。

来年で50周年になるが、最近まで雨もりを楽しむ保育園だった。園の周りには里山が広がっている。里山はあってあたりまえの対象だった。命は自然とともに進化・多様化してきた。都市化されればされるほど、子どもたちには社会の仕組みが見えにくくなっていく。自然とのかかわりが大切になってくる。原因と結果を子どもたちの生活経験の中に入れることが大切。子どもたちの周りに、里山の恵みを受けながら暮らす大人がいてくれる経験を原風景にして、子どもたちがその中で遊び、大人を手伝い、達成感を味わえたり、そんな関係を保育園の周りの大人たちとのたくさんの出会いを通して作っていきたい。

鈴木康博さん

身近な自然環境の減少に伴い、子どもたちの遊び場は公園が中心となったが、公園は安全性に配慮して「やってはいけないこと」を設定したため、子どもたちの自主的な発想による遊びが少なくなっている。千葉市では、子どもたちが自分の責任で自由に遊ぶ空間づくりをめざし、「子どもたちの森」の整備を進めている。「子どもたちの森をつくる会」をつくり、また、「子どもたち森だより」を発行している。段階的森づくりとして、4つの「づくり」。ものづくり（行政がつくるものではなく、みんなでつくるもの）、企画づくり（行政企画ではなく、市民企画）、仲間づくり（地権者、近隣住民、学校、市民団体などの地域資源と連携・協力）、ルールづくり（みんなが合意）。キーワードは、人のつながり・地域の人材の活用・行政も現場に入り込むこと。課題は、行政内の役割分担。

古川美之さん

現在の生活の中には自然が少なく、いわゆる作られた公園が多い。自然豊かな中で暮らしたいと思っていたところ、ちば環境情報センターという市民団体と関わるようになって、市民でもできることがあると知った。平成13年から身近なところで仲間集めを始め、14年には地元の公園を借りて、プレーパーク（冒険遊び場）を開設した。県のモデル事業「県・市町村・NPOがともに築く地域社会事業」がきっかけで16年9月には里山を借りて、四街道プレーパーク「どんぐりの森」をオープンした。自然の中ではいろいろな発見があり、子どもたちはそこにあるものを利用して遊びができるようになった。手入れをしすぎてはいけない。

「場」ができると、人が集まってきて、いろいろな人たちと関われる。行政だけでは進まないときには、自ら行動を起こし、多くの人に知ってもらい、地域の人を巻き込むことが大切。

### 討論会等の内容

"(問い)自然と触れ合う機会のない子、関心のない子、親が関心のない子が体験するようになるにはどうしたらいいのか。(回答)やってみないとわからないので、時間をかけて、都合のよいときに、気の長い付き合いが必要。楽しく、無理せず、頑張りなさい。いろいろな参加の仕方があるということを伝える。遊べない子には、生き生きと遊んでいる子の姿を見せたり、スタッフがサポートする。子どもの生活圏に、身近に「遊び場」があることが必要。

(問い)身近にプレーパークになりそうな場がないとき、都市公園を生かすにはどうしたらいいか。

(回答)その「場」での遊びを工夫することが大切。プレーリーダーを養成し、派遣してはどうか。

参加者から

テレビゲームの遊びが定着してしまい、なかなか外に出ようとしない子が多い。ふるさとのない子どもが増えている。里山は総合学習の場である。里山はストレスを癒してくれる。子どもの存在そのものが里山。都市化で身近な自然・里山が失われて、子どもたちが自然に触れ合う機会が減ってしまった。社会とかかわらない、実体験の乏しい現代の子どもたち。自然に関わることで多くのことを発見し、実感する。思いを実現していくためには、自らが声を出し、場をつくり、人を巻き込み、つながっていくことが重要で、政策とは私たち自らがつくっていくものである。"

### 分科会の結論

自ら積極的に社会の仕組みに関わっていくことが少なくなっている現在、自分には関係ないと思っている人たちをどう巻き込んでいくかが課題である。

### 分科会の課題

木の枝で隠れ家をつくったり、落ち葉を集めて積み上げたり、つるにぶら下がったり……。いったん森の中に入りさえすれば、子どもたちはそれは生き生きと自由に遊びを編み出す。里山は想像力をふくらませる「場」。

里山に子どもたちの声が響く保育園、子どもたちを自然の中で育てたいとの思いからプレーパークを実現したおかあさん、都市部でも豊かな自然の遊びを提供する自治体など様々な取り組みが行われている。

豊かな自然の中で子どもたちを育てたい、それは誰もが望むこと。行政任せにせず、自らが声を出し、動き出す勇気が必要。同じ思いを持った様々な人々がつながり、行政とも連携して、思いが形になったとき、大きな喜びや達成感が生まれる。

政策とは自らつくっていくものである。

### 分科会の提言

### その他特筆すべき内容

### 反省等

「政策」という名称が硬く、取っ付き難かったのだろうか、参加者が少なかった。

### その他

### 目的

報告書掲載予定写真・カット・図版等